希望学

第1回　玄田有史さん

釜石と希望学

希望学プロジェクト

希望とは何か、どのような社会に希望は生まれるのか、一人一人の希望が社会や地域にどのような効果を与えるかといった問題を、アンケート、インタビュー、文献の考察などによって明らかにすることを目指しています。このプロジェクトで釜石を訪れ、調査に当たった東京大学社会科学研究所の皆さんから、釜石で感じたこと、調査によって分かったことなどを、連載で紹介します。

釜石に来て、良かった

釜石に来て良かった―。つくづくわたしは、そう思う。06年1月に初めて訪問して以来、8回も釜石に来ている。わたしは島根県松江市の出身だが、自分の実家でさえ、特別の事がない限り、これほど頻繁に戻ることはない。不思議なもので、東京駅から釜石市に電車で着くまでの4時間半弱の時間が、どんどん短く感じるようになった。

釜石を訪れることになったきっかけは、東京大学で『希望学』という研究が始まったからだ。どうやったら希望を持って生きていけるのかを、いろいろ考えてみたい。製鉄の町、ラグビーの町として、全国でも知られた釜石。地方の希望の星だった釜石の人たちが、多くの試練を乗り越え、新しくどんな希望を持って生きているのかを知りたい。そう思って、釜石を訪れた。

これまで釜石でわたしたちは、延べにして300人以上の方々からお話しを伺ってきた。人口が9万人を超え、今よりもっと活気のあった時代を知る人にとって、現在はお世辞にも栄えているとは言いにくい。しかし、かといって、「昔は良かった」とクヨクヨしてばかりいる人に、わたしたちが出会うことは無かった。出会ったのは、文字どおり、北の鉄人らしい、強さと大らかさだった。厳しい現実から逃げない。やるべきことを淡々とやっていく。決して強がったり、見えを張ったりしない。そんな清清(すがすが)しさを、多くの釜石の方から感じてきた。

希望学では、希望を持って意欲的に仕事をしているのはどんな人か、全国アンケート調査をしたことがある。すると、過去に就職してから挫折をまったく経験してこなかった人に比べ、さまざまな挫折を経験し、それを乗り越えてきた人のほうが、明らかに希望を持って意欲的に働いていた。釜石で聞いた生身のお話しは、そんな研究を見事に裏づけてくれた。

聞くことの大切さ

いろいろお話しを伺いながら、嬉しい事が、たくさんあった。釜石を訪問するたびに、いつもおいしいお酒と肴に付き合ってくださる方から、あるとき、こんなことを言われた。

「いやあ、東大さん(わたしたちのこと)に、来てもらって良かったですよ」「そうですか。どうも。でも、どうしてですか」「おやじが、元気になってきたんです―」。

希望学のメンバーの何人かは、やはり釜石を訪問するたびに、その方のお父さんからお話しを伺ってきた。製鉄所で何十年も働き、現在は引退されたその方に、当時をお聞きしながら、釜石の歴史を改めて知り、未来のあり方を考えようというのだ。

最初は、初対面ということもあり、どこかぎこちない。言葉のなかには聞き取れない言葉も、正直ある。なかなか、すぐにはうまくいかない。

それが、二度、三度と、お話しを伺っていると、お互い打ち解けてくる。そのうち、とうとう、東大さんがまた来て、話しを聞くのを楽しみにしてくださるようになり、それが元気の源にもなったというのだ。

それを聞いて、わたしたちも嬉しかった。そして、驚いた。これまで語ってこられなかった、人生についてお聞きすることは、聞く人間だけでなく、語る人間をも、幸せにするのだ。日ごろ、わたし自身、「自分のやっていることは、社会に役に立っ

Profile　げんだ・ゆうじ
昭和39年島根県生まれ。東京大学社会科学研究所教授。専攻は労働経済学。著書『仕事のなかの曖昧な不安』『ジョブ・クリエイション』『ニート』など。

「おやじが元気になってきたんです」それを聞いて、私たちも嬉しかった

ているんだろうか」と、感じることがある。国民の皆さんの税金に支えられながら、大した発明をする訳でもない。景気を良くしたり、雇用を増やしたりする具体的な提案ができる訳でもない。ただ、真剣にお話しを伺い、その素晴らしい内容を多くの方に伝えていくことは、わたしたちの大事な仕事だと信じている。もしかしたら、このような「聞く」ことを通じて、わたしたちも社会に、ほんのささやかではあるが、恩返しできるのかもしれない。釜石は、わたしたち研究者にとって、本当に大切なことを教えてくれた。

釜石から全国へ

07年3月に市民文化会館で、わたしたちが釜石で学んだ内容を中間報告会として発表し、２００人を超える方々にご参加いただいた。その内容を、07年5月ごろに全国の地方紙に向けて、寄稿したことがあった。

その反響は思いがけず、大きかった。仕事でいろいろな地方を訪問すると、その記事をお読みになったのか、「希望学、面白いですね、注目してます」とか、「釜石、いいですね。一度行ってみたいです」とか、声をかけていただいたりする。

08年になって、希望学との共同調査の正式なお申し出もあった。福井県の西川知事が、わざわざ東大までお越しいただき、２０３０年の福井の希望について、一緒に考えたいというお誘いをいただいた。

福井は全国的にみても、失業率や犯罪率などが低く、反対に出生率は高いなど、高い県民満足度を誇っている。ただ現状に満足しているだけでいいのか、将来に希望があるといえるのかを、改めて考えなければ。そうおっしゃる知事の言葉には、釜石でも感じた、地域を真剣に考えている人、特有の誠実さがあった。これからは釜石と同時に、福井からも多くを学んでいきたいと思っている。

希望学自体は、05年度から3年間を予定して始まり、4年目である今年度は、これまでの成果を取りまとめて、世に問う年になる。来春には、釜石で伺ったお話や、4つの市内の高校同窓会の皆さんにご協力いただいたアンケートを分析した「釜石の希望」（仮題）についての本を出版する予定である。

その上で、わたし個人としては、何らかのかたちで、希望学をこれからも続けていきたいと思っている。

多くの方々と、お酒を酌み交わしながら、未来の希望を考え続けたい。おいしいお酒と肴のある地域、希望の火を地道に灯し続ける人の生きる地域は、永遠に不滅だ。

さらに釜石調査のうれしい成果として、参加した2人の若手研究者が高知県にある大学に4月から奉職することとなった。

将来は、釜石をきっかけに、福井、高知のほか、全国の魅力ある地域が、希望を一つの軸につながり、お互いに風を吹かしあう関係になっていけばと、ひそかに願っている。

そのとき仙人峠から吹く風は、時に厳しくも、希望を持って行動する人々にとって心地よい追い風となると、わたしは確信している。